共働き子育て家族の生活と住ニーズ

加茂 みどり

研究の背景・目的

近年共働きの夫婦が増加しており、夫婦が共に働きながら子どもを育てやすい社会環境を構築することは重要である。共働き夫婦のワークライフバランスを整え、子どもを育てる喜びを誰もが得られる環境は、女性だけでなく男性にとっても必要である。

一方で、共働き夫婦の多様性にも配慮する必要がある。共働き夫婦には多様な経済層・職種の組み合わせが考えられ、すべてをまとめて共働き夫婦とし、居住の課題やニーズを見出すことは困難である。

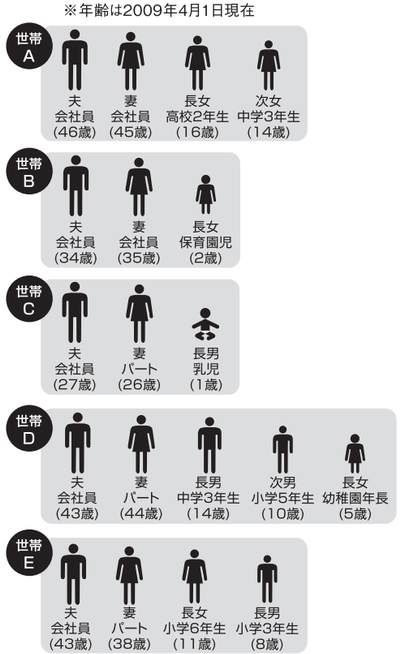
以上のような認識から、本研究では世帯主が中堅企業社員である共働き世帯の調査から、そのニーズと居住の課題を抽出することとした。その結果を分析することにより、該当層の共働き世帯に対応した住宅計画の検討課題を抽出することを目的とする。

研究の方法と調査概要

研究の方法としては、大阪ガス実験集合住宅NEXT21(※)に居住する共働き子育て世帯の5世帯に対し、生活や住環境評価に関するアンケート調査、補足のためのヒアリング調査を実施・分析した。アンケートは2008年12月から2009年1月にかけて、ヒアリングは09年3月上旬から4月下旬にかけて行った。

【図1】調査世帯の家族構成

※年齢は2009年4月1日現在



アンケート調査からみた調査対象世帯の生活

図1に調査世帯の家族構成を示す。世帯Aは、40代の夫婦で、子どもも高校生と中学生であり、ほぼ子育てに手がかからなくなっていることが推測できる。夫も妻もフルタイム就労であるが、妻は残業がなく、勤務地も夫より近い。

世帯Bは、30代の夫婦である。子どもは2歳、最も子育ての負担が大きい時期である。夫も妻もフルタイムで就労し、夫は残業があり、妻も空港のスタッフとして就労しているため、早朝出勤や午後出勤のある変則勤務である。勤務地も遠いため、早朝4時に家を出たり、夜中の0時半に帰宅することもある。

世帯Cは、夫は会社員でフルタイム就労、妻は看護士で、週2、3日夕方のみのパートタイム就労である。子どもは1歳であり、出産前はフルタイム就労であったが、産休と育休を取得後、パートタイムで復帰した。

世帯Dは、夫は会社員でフルタイム就労、妻は自宅近くの学校の学食で、平日9時30分から14時までのパートタイムで就労している。子どもは中学生と小学生の男児、幼稚園に通う5歳の女児の3人であり、家事や育児の負荷が高いことが推測できる。

世帯Eは、夫は会社員でフルタイム就労、妻は保育園で平日14時30分から18時30分までパートタイムで就労している。子どもは小学生の女児と男児である。

以上より、妻の勤務形態と子どもの年齢による調査世帯の位置づけを表1に示す。

【表1】妻の勤務形態と子どもの年齢による調査世帯の位置づけ

妻の勤務形態	子どもの年齢		
	乳幼児	小学生	中高生
フルタイム	世帯B		世帯A
パートタイム	世帯C	世帯E	
	世帯D		

各世帯の夫婦の家事分担について、世帯の家事全体の内、自分が分担していると思う割合を夫婦それぞれに回答してもらった(表2)。これをみると、共働きであっても、妻の家事分担が圧倒的に多いことがわかる。しかし、その中でも世帯Bと世帯Dの夫は、妻の認識とは若干ずれがあるものの、比較的家事を分担している。特に世帯Bに関しては、前述の妻の勤務形態から、ある程度の夫の家事分担が必要不可欠と考えられる。また、各世帯夫婦の、家事に対する負担感(表3)をみると、世帯Dに関しては、夫が家事をある程度分担しているにもかかわらず、妻の家事に対する負担感が大きい。買い物頻度についても、世帯D・E、特に世帯Dの妻の買い物頻度が高かった。食べ盛りの男児2名と幼児を抱える世帯Dの、こなすべき家事の絶対量の多さをうかがわせる。また、夫がほとんど家事を分担しないにもかかわらず、世帯Aと世帯Eの妻は、自身の家事分担をすべて9~10割とは考えていない。自分以外の家事分担者に子どもがあげられており、小学校高学年以上の子どもが家事を手伝うことにより、妻の負担が軽減されていることがわかる。

育児の分担について負担割合を聞いた回答を次頁の表4に示す。育児負担がほとんどない世帯Aは調査対象としなかった。これをみると、やはり妻の分担が多いものの、家事に比べると夫の分担が多い。中でも「遊び相手」や「勉強」に関する分担が若干多くなっている。自分以外の育児分担者としては、世帯BとCで実母や実父、義母があげられており、乳幼児の育児分担を親族に頼る様子がうかがえる。

【表2】調査世帯の家事分担割合(自分が分担していると思う割合)

世帯	夫の家事分担割合 (割)				妻の家事分担割合 (割)				夫婦以外の家事負担者
	炊事	買物	掃除	洗濯	炊事	買物	掃除	洗濯	
A									子
B									夫の母
C									なし
D									子
E									子

0~2割
3~5割
6~8割
9~10割

【表3】調査世帯の家事負担感

世帯	夫の家事負担感				妻の家事負担感			
	炊事	買物	掃除	洗濯	炊事	買物	掃除	洗濯
A								
B								
C								
D								
E								

全くない
あまりない
少し負担
とても負担

共働き世帯の住ニーズと居住の課題

本章では、前章の各世帯の状況を踏まえ、ヒアリング調査を詳細にみることによって、各世帯の居住の課題やニーズを抽出する。ヒアリング調査の内容をすべて書き出し、その中から、「家事」、「育児・子ども」、「余暇」に関するコメントで、就労に関係するものを抽出した。

【表4】調査世帯の育児分担と負担感

	世帯	朝の身支度	持ち物準備	朝食準備	昼食準備	夕食準備	食事の付き添い	送り	迎え	行事やPTA	遊び相手	おもちゃの片付け	勉強をみる	稽古事の送迎	外遊びの付き添い	トイレの付き添い	風呂	歯磨き	寝かしつけ	看護	自分以外の分担者	負担感
夫の育児分担(割)	B												不要	不要							配偶者・実母	あまりない
	C																				配偶者	あまりない
	D													不要		不要					配偶者	あまりない
	E				不要		不要	不要	不要							不要		不要	不要		配偶者	全くない
妻の育児分担(割)	B				不要					不要			不要	不要							配偶者・義母	あまりない
	C																				配偶者・実父・実母	あまりない
	D																				配偶者	少し負担
	E				不要		不要		不要					不要		不要	不要		不要		配偶者	あまりない

0〜2割
3〜5割
6〜8割
9〜10割

❶ 家事について

まず各世帯が、日常の買い物に関して関心が高く、工夫をしていることがわかった。世帯Aは、通勤経路上の駅、特に自宅から最寄り駅までの間に買い物場所がないことに不便を感じ、勤務地近くで軽量のものを購入し、重いものは個別宅配による買い物をしている。また自宅近くの商店街の閉店時間が早いことにも不都合を感じている。世帯Bは休日にまとめ買いをし、かさばる物の運搬に苦慮している。世帯Cは多くの課題はないものの、買い物の短時間化をはかっている。世帯Dの買い物量が非常に多いことがうかがえ、夫婦で順番に買いに行くなどしている。世帯Eも仕事の帰り道の「デパ地下」を利用し、出来合いのものを利用している。

また、調理の作りだめ(世帯B)や、出来合いの調理品を購入すること(世帯E)で、家事の効率化や軽減をはかる一方、つい最近まで専業主婦をしていた世帯Dと世帯Eの妻は、家事にかけられる時間が少なくなり、以前と同じ量の家事をすることができなくなったと考えている。家事の効率化は、フルタイム就労の世帯だけでなく、納得感のある家事をこなしてきた専業主婦がパートタイムで就労する時にも発生するニーズとなる可能性がある。

そして、アンケートでみられた子どもによる家事分担が、ヒアリングからも確認できた。

❷ 育児について

育児については、妻が同じフルタイム就労でも、世帯Aの子どもが成長し、ほとんど負荷がないのに対し、世帯Bにとっては多大な負荷となっていることがわかった。親族の協力を得て、なんとか就労を継続しているが、妻の身体的疲労は大きい。しかしながら、ベビーシッターに頼むことについては、その信頼性からためらいや抵抗がある。

妻がパートタイム就労の世帯C・Eについては、育児の負荷が、現在はそんなには大きくないことが確認できた。しかし育児負荷は少ないものの、世帯Eの妻は、子どもとふれあう時間が短いとしている。世帯Dは、3人の子どもの育児負荷は重いと考えている。

❸ 余暇について

余暇については、個人によるところが大きいが、総じて夫は比較的趣味の時間を持ち、それに関連して自分の個室に対するニーズも高い。しかし、世帯Bに関しては、夫婦ともに余暇を楽しむ時間は全く残されていないことがわかった。

世帯Cの妻は、平日2日しか就労していないこともあり、比較的余暇を楽しむ余裕がある。しかし、同じパートタイム就労であっても、平日は毎日就労している世帯Dの妻は自分の余暇を楽しむことや自分の個室についてはほぼあきらめているというコメントがあった。世帯Eの妻も、ほとんど余暇に関するコメントはなかった。また総じて妻は、外食を楽しむ機会も少ない。

まとめ

前章の結果をまとめると、表5のようになる。これらより、世帯主が中堅企業社員である共働き世帯に対応した住宅計画の検討課題として、以下の点がある。

【表5】ヒアリング結果のまとめ

世帯	妻の勤務形態	子どもの年齢	生活状況及びニーズ		
			家事	育児	余暇
A	フルタイム	中高生	通勤経路上に買い物場所が必要。重い物は個別宅配を利用。子どもが家事を手伝う	育児には手がかからない	ある程度の余暇を楽しむ余裕がある
B		乳幼児	休日にまとめ買い・おかずの作りだめをする。買い物時、荷物を自転車に積むのに苦労する	家事と合わせ、身体的にかなりの負担となっている。シッターサービスの利用には抵抗がある	夫婦ともに余暇を楽しむ余裕は全くない
C	パートタイム	乳幼児	手早く買い物を済ませたい	育児負荷は軽い	ある程度の余暇を楽しむ余裕がある
D		中学生 小学生 幼児	家事をする時間が少なくなり、手が回らない。夫婦で何度でも買い物に行く。家事の絶対量が多い	3人の子どもの育児負荷は重い	夫は余暇を楽しむ余裕がある。妻は自分の余暇はあきらめている
E		小学生	通勤経路上で買い物をする。出来合いのおかずを買う	子どもとゆっくり話す時間がない	夫は余暇を楽しむ余裕がある。妻は余暇についてのコメントはない

①就労する妻の買い物は通勤経路に規定され、利便性の高い買い物場所がない場合、個別宅配などのサービスを利用する可能性があり、宅配サービスへの対応の検討が必要となる可能性がある。

②家事の軽減や効率化は、フルタイム就労する世帯だけでなく、育ち盛りの子どもを持つ世帯、妻が専業主婦からパートタイム就労を始めた世帯においてもニーズがある。一方でプライバシー等の理由から、シッターサービスについてはニーズが抽出できなかった。就労する妻は、子どもとふれあう時間や、余暇活動が少ない可能性があり、その時間の確保や健康のためにも、家事の軽減や効率化の方法や、信頼できるサービスのあり方に関し、検討していく必要がある。

③小学校高学年以上の子どもは、家事の担い手となる可能性がある。また、親族による育児や家事に対する協力も存在する。妻だけでなく、夫、子ども、親戚、そして可能性としてはサービス業者も含め、多様な人が、同じ住戸内で家事をすることを想定しなければならない。

④同じ経済層と考えられる共働き子育て世帯であっても、就労形態、子どもの年齢や人数によって、育児や家事の負担には量・質に違いがある。住戸の可変性のあり方など、個別的・短期的な住ニーズへの対応を検討する必要がある。

(大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所 研究員)

(※)NEXT21は大阪ガス㈱により企画・建設され、1993年に竣工した。地下1階、地上6階の鉄筋コンクリート造、18戸の集合住宅である。3階以上の16戸の住戸で実際に社員が居住する実験が行われている。

■参考文献
加茂みどり・高田光雄「共働き家族の生活と住ニーズ―実験集合住宅NEXT21における居住実験を通じて―」日本建築学会住宅系研究報告会論文集4、pp.307〜314、2009